

## 平成12年度第3回生物物理学会運営委員会議事録

日時：2000年4月1日（土）13：00～19：10

場所：愛知県中小企業センター7階1会議室

出席者：郷（通）会長、七田副会長、木下副会長、阿久津、片岡、木寺、桑島、白井、曾我部、月原、豊島、難波、船津、倭、由良各運営委員、石渡編集実行委員長、大木 H12 年会実行委員長、今井 H13 年会実行委員長、河合会長秘書

欠席者：田之倉、都甲各運営委員

### 報告事項

#### (1)賞・助成金委員会報告（七田）資料 報1

神戸大・赤坂一之氏を山田科学振興財団研究援助候補者として推薦した旨報告があった。また、次の財団選考結果が報告された。精山明敏氏（郵政省通信総合研・関西先端研究センター）が第26回日産学術研究助成（一般）に採択。郷会長より学会では積極的に賞に推薦していく方針であるので、会員も積極的に助成金などに申し込むように要請があった。

#### (2)日本光生物学協会委員会報告（郷（通））資料 報2

日本光生物学協会の津田基之会長による報告書が配付され、郷（通）会長より報告がされた。

#### (3)理学データ推進小委員会第4回連絡会議報告（郷（通））資料 報3

理学データ推進小委員会第4回連絡会議報告があった。これは学術会議中にある委員会であること、出席者の旅費が生物物理学会から支給されていることが説明された。この報告書中の生物学分野のとりまとめ案について、運営委員会の意見を求められているとの説明があり、意見・依頼がある運営委員は会長室あて E メール等で4月4日(火)までに連絡するよう要請があった。会長室から理学データ推進小委員会に参加している中村春木氏(阪大)に伝える。

#### (4)平成13年度次期会長候補者選挙結果報告（曾我部）資料 報4

学会委員による平成13年度次期会長候補者推薦結果について、選挙管理委

員に

より3/17に開票され、35名の有効投票（投票率70%）があったとの報告がなされた。投票率は前回とほぼ同じ。候補者氏名（5票以上）は以下の通り、括弧内は得票数。柳田敏雄(17)、石渡信一(12)、津田基之(12)、木下一彦(11)、桐野 豊(7)、曾我部正博(7)。

#### (5)生物物理学研連委員会報告（郷（通）） 資料 報5

平成12年2月4日（金）に第17期・第7回生物物理学研究連絡委員会が日本学術会議第7部会議室にて開催され、以下の様な委員会報告がされた。出席者は郷(信)委員長、桐野委員、郷(通)委員、田之倉委員、月原委員、永山委員、中西委員、宝谷委員、伏見委員、巖佐委員。欠席者は木下委員、堀田委員、松本委員、柳田委員、和田委員であった。

##### （1）報告事項

##### a) 学術会議の自己改革

郷（信）委員長より以下の説明があった。国の行政改革をきっかけに議論されてきた日本学術会議の自己改革への道は、一昨年来吉川会長の主導で進められてきたが、昨年夏前に（改革案の）起草委員会が柏崎学術会議副会長を委員長として作られて以来、急速に会員の多様な意見をまとめる形に進み始め、10月の総会において「日本学術会議の位置付けに関する見解」「日本学術会議の自己改革案」という二つの文書にまとめられた。前者では、日本学術会議のボトムアップ的性格を強調し、行革後は総合科学技術会議と並んで内閣府に置かれるべきであると主張している。後者では、学術会議の抱えている問題を分析し、学術会議運営審議会の中に企画委員会を設け、個別の領域の枠組みでは取り扱いにくい課題に適切に対応する等の自己改革を提案している。

##### b) 東アジア生物物理学シンポジウム準備状況

郷（通）委員より以下の説明があった。第3回東アジア生物物理学シンポジウム（2000年5月22－26日、韓国慶州）について、日本から主催国韓国の事務局宛にセカンドサーキュラーを請求したのは、現在までに98名である。事務局長の Kang 先生から日本生物物理学会宛てに次の知らせと依頼が来た。

（1）セカンドサーキュラーは1月中に印刷予定。（2）ホテルが「ホテル現代」から「慶州ヒルトンホテル」に変更になった。シンポジウムもこのホテル

で行われる。会場と宿泊（１５０室を確保）を主催者側が一緒に予約したので、参加者はこのホテルを利用して欲しいとの要請があった。

c) 生物物理研連のあり方に関して委員長より、生物科学研連で合同研連をしたかどうかという提案があるとの発言があった。２日間で研連を行い、１日目は関連研連を個別に開く、２日目はすべての関連研連委員が一堂に会した合同の研連を開くということで良いかという郷（信）委員長の提案について、郷（通）委員から生物物理学会では運営委員会で話したと発言があった。郷（信）委員長からは次のような発言があった。精神が理解されたということで現在では良い。生物物理、細胞、分子、すべてで１００名くらいになる。生物科学関連研連での接触を図るようにし、財源としては生物物理研連は生物物理学会しかないので、生物物理学会に対応をお願いしていく。生物科学研連には生化学研連は入っていない。生物科学研連には生化学研連に入ってもらうよう要請する方が良い、部会横断的な方が良いので生化学研連が入っている方が良いとの意見が出た。

#### d) 平成１２年度代表派遣

委員長から次の報告があった。２０００年１０月にイスラエルで開かれる I U P A B Council Meeting に永山国昭氏を派遣する１件のみを学術会議第４部に推薦した。

#### e) ICBP ２００１の準備状況

ICBP ２００１の準備状況について、伏見委員から次のような報告があった。First Circular を ７５００部印刷し、垣谷氏らの名簿作成努力により、数ヶ月かけて、海外に ２１００部、国内に ５０００部を配布することができた。１月２６日現在の Pre-registration の数は、国内 ６９，海外 ３１である。永山氏らの努力により、募金委員会が組織され、１月下旬に募金趣意書が印刷されたので、これから募金活動に入ることになる。

### （２）審議事項

#### a) 科学研究費の審査について

郷（信）委員長から以下の説明があった。５月には科学研究費を使えるようにするために、今年から申請が２ヶ月早くなる。また、審査員の推薦が年に１２人になり、一度決まると２年継続になる。今年は特別に１０名を推薦して、うち６名が継続の扱い、残り４名が一年限りということに、前回の研連委員会で決定した。今後は順位をつけて１２名を推薦し、そのうち上位６名が採択され

るはずであるが、ときどき逆転することがある。ただし、その理由は学術振興会から提示されない。生物物理学会に12名、関連学会に4名の推薦を依頼する。科研費審査員の推薦を依頼する生物物理学会以外の学会はさしあたり4学会である。科研費審査員グループを次のように6, 3, 3に分けて審査するという説明が追加された：基盤A、Bを6人、基盤Cを3人、奨励、萌芽を3人で、それぞれ審査する。学術振興会でグループ分けするが、そのときに審査員の専門を参照する。したがって、専門としては(1)「構造・物性」と(2)「機能・生理」のどちらかしか書かないことにするという考えが郷(信)委員長から出された。規則を決めない方がフレキシブルに対応できるという意見が出された。規則を決めておけば毎回決める必要がないとの意見も出された。この数年毎年変わっているなのでその対応で大変だったとの発言があった。これに対して、規則を決めると変えるのが大変であり、ガイドラインにしておけばフレキシブルに変え得るとの意見が述べられた。その後討議をつづけて、採決をとることにしたが、ガイドラインでは細かいところまで決めていないというニュアンスがないかとの疑問が出されたので、採決は「規則」と「指針」のいずれにするかで行った。「規則」とすることに賛成の委員が4名、「指針」とすることに賛成の委員が5名であったので、「指針」とすることに決定した。次に、委員長から原案が出され、指針の内容について議論した(決定された指針について以下の科学研究費「基礎生物学」分科「生物物理学」細目の審査委員候補者の推薦に関する指針を参照)。

科学研究費「基礎生物学」分科「生物物理学」細目の審査委員候補者の推薦に関する指針(2000年2月4日生物物理学研究連絡委員会において採択)

#### 背景

1. この細目は、1段審査員定員12名の内の通常は2年目継続の委員6名を除く新規の6名を選ぶための候補者12名を、順位を付け学術会議を通して学術振興会に推薦する。
2. この細目は窓口研連を生物物理学研究連絡委員会(以下、生物物理学研連)とする。生物物理学研連は、①関連学会に審査委員の候補者となるべき者の推薦を依頼し、②推薦されたものから最終候補者を選ぶ。
3. 「基礎生物学」分科の第2段審査委員は4名で、生物物理学研連、分子生物学研連、細胞生物学研連、発生生物学研連が各1名ずつを推薦することに、

これら研連の間の話し合いによって決定されている。生物物理学研連はその推薦による委員が2年目継続でないときには、新規の候補者2名を順位を付け学術会議を通して学術振興会に推薦する。

#### 指針

1. 背景1に従って第1段審査委員候補者を学術振興会に推薦する際に記載する各候補者の専門は①「構造・物性」、②「機能・生理」の何れかとする。
2. 関連学会は「日本生物物理学会」の他、学術会議登録学術団体である「日本物理学会」「日本結晶学会」「日本蛋白工学会」「日本バイオイメージング学会」とする。
3. 日本生物物理学会には、毎年専門①、②の候補者となるべき者各6名、計12名の順位付き推薦を依頼する。日本生物物理学会以外の関連4学会には、毎年2名ずつの候補者となるべき者の順位付き推薦を依頼する。
4. 生物物理学研連で学術振興会に提出する候補者を選定する際、日本生物物理学会から推薦された候補者の中からその順位を尊重して、専門①、②の候補者を各4名ずつ、かつ上位6名中に各2名ずつ含める。日本生物物理学会以外から推薦された候補者の中から、継続委員の推薦学会でない学会の推薦候補者をその推薦順位を尊重して4名、かつ上位6名中に2名含める。日本生物物理学会以外から推薦された候補者の専門は、生物物理学研連で判断して決める。
5. 第2段審査委員候補者となるべき者の推薦は、日本生物物理学会に依頼する。
6. 上記の指針で決められない事態が生じた場合には、生物物理学研連において判断し決定する。
7. この指針は、関連学会の範囲を含めて、生物物理学研連委員から問題が提起された場合に、その都度見直す。

「構造・物性」と「機能・生理」に分けて良いかという、指針1の提案に対して反対がなく、採択された。指針2の審査員候補者の推薦を依頼する学会については、毎回推薦団体を見直すことを明らかにした上で、今回はこの文言にすることになった。指針3については、原案に次の二案があげられていた：(a案) 日本生物物理学会には、毎年専門(1)、(2)の候補者となるべき者各6名の順位付き推薦を依頼する。日本生物物理学会以外の関連4学会には、毎年1名ずつの候補者となるべき者の推薦を依頼する。その専門は各学会が決めるものと

する。; (b 案) 日本生物物理学会には、毎年専門 (1)、(2) の候補者となるべき者各 6 名の順位付き推薦を依頼する。日本物理学会および日本結晶学会には、毎年専門 (1) の候補者となるべき者の推薦を依頼する。日本蛋白工学会および日本バイオイメーシング学会には、毎年専門 (2) の候補者となるべき者の推薦を依頼する。このことについて討議した。科研費「生物物理」の審査が出来ない人が推薦されたらどうするかという疑問が出された。委員長は、推薦されたら受け入れざるを得ないが、その学会に審査を行う上で困ったことを伝え、次の年には生物物理の審査が出来る人を選んでもらおうと回答した。委員長は、ローテーションという案について、機械的に選ぶと説明した。同じ人が生物物理学会と他学会から推薦されることがあるという意見に対し、委員長は、生物物理学会から 1 2 人推薦ということにしてあると回答した。a 案か b 案かを採択した結果、a 案は 6 名、b 案は 4 名が賛成だったので、a 案で行うことに決まった。審査員を推薦する前に研連を開くかという質問について、委員長から、3 月に学術振興会から各学協会に推薦依頼を出し、5 月中旬に研連から学術振興会に回答するので研連を開くことは出来るが、委員長と幹事 2 名で判断することで良いかとの提案があった。研連を開くと候補者が広く知れ渡るので、それは避けた方が良いとの意見が出た。1 機関 1 人という同一組織からの重複を許さない問題にはどうかとの問いかけがあった。委員長は、各学会から順位をつけて 2 人推薦してもらい、対処すると述べた。関連 4 学会のうち、物理学会には郷 (信) 委員長から伝え、他の 3 学会についてはここにいる担当委員から伝えることになった。今回はローテーションの最初なのでどの学会からの候補を推薦するか委員長が決めることになった。今年の 10 人のうち、4 人は一年限りだが、来年の候補となるかということについては、避けた方が良いということになった。

#### b) 生物科学研連のあり方について

郷 (信) 委員長から以下の報告がされた。日本学術会議の生物科学研究連絡委員会は、生物関係の研連の委員長を委員とする研連である。現在の生物科学においては従来の学会・研連の枠を越えた取り組みを必要とする学術的および学術行政的問題が多くなってきているとの認識の上に、それに対処するため、次の 2 点が生物科学研連で提案されている。

1. 試行的に、基礎的な生物科学に関わっている研連を二日の会期で、同じ日に学術会議において開く。初日は各研連に分かれて、それぞれの問題を取り上

げる。二日目は、参加研連の合同の会議を開く。そこでは主として個別の研連の枠を越えた問題を取り上げる。2000年秋に開かれる18期の第1回の研連をそのような形で開く初回とすることを目指す。現在の生物科学研連で、合同研連において議論すべき議題の整理等の準備をする。

2. 従来の研連の枠を越えた問題が出てきたときには、それに関して必要な小委員会の設立をこの合同研連あるいは生物科学研連で提案する。小委員会召集に必要な費用は、日本学術会議からは支出されないので、参加研連に関係の深い主要な学会に負担してもらう。生物物理研連はこの提案を支持することが、確認された。また、生物物理学会運営委員会でもこの件が議論され、支持の方針が確認された旨報告があった。

#### c) 前回議事録の承認

議事録は一部訂正の上承認された。以後は各研連委員にメールで事前にチェックしてもらうことにする。

#### (6)平成13年度科研費委員候補者選挙結果報告 (曾我部) 資料 報6-1,2,3

曾我部選挙管理委員長より平成13年度科研費審査員第一段、第二段候補者選挙結果の報告があった。一段審査員に関しては、得票数6票以上の内、無資格者(年齢制限61歳による)を除いた46名、および得票5票から年齢の若い順に順位を付けた2名の計48名が選ばれた。

#### (7)科研費委員(細胞生物学)について (郷(通)) 資料 報7

矢原細胞生物学研連委員長から科研費審査員推薦の条件について連絡が来たことの報告があっ

た。細胞生物学研連に科研費審査員を推薦する学会の資格としては、(1)学会員500名以上、(2)細胞生物学研連を関連研連の1位または2位で届け出た学会、である。追加資料として学術会議からの依頼文が回覧された。次回(平成14年秋ごろ)までに関連研連委員会の優先順位を指定する時に、現在第3位としている細胞生物学研連を第2位として、細胞生物学研連に科研費審査員の候補者を推薦することを検討する必要がある。

#### (8)平成12年度年会準備状況 (大木) 資料 当日配布

大木年会実行委員長から平成12年度年会準備状況についての以下の報告が

あつ

た。

- ・開催要項は会誌 40 巻 2 号に掲載され、すでに配布されている。

- ・発表申し込みと講演抄録の受付が、大学病院医療情報ネットワーク UMIN に  
よって

6/1-6/28 正午まで行われる。

- ・本年度は、分野別専門委員の推薦およびシンポジウムの抄録の登録もオンラ  
インで

行われる。

- ・宿泊・交通について年会ホームページから東北大学生協トラベルコープへの  
リンクを張り電子メールでの予約を可能にする。

- ・「生物物理学会 40 周年記念シンポジウム」は一般に公開することとし広報  
につと

める。

- ・記者会見に対する対応の判断は郷（通）会長に一任する。

託児所の開設について郷（通）会長より広報を徹底して欲しいとの要請があつた。この後、審議事項(8)「第 38 回年会の予稿集抄録の公開について」の審議を行った。

#### (9) 平成 13 年度年会準備状況 （今井） 資料 報 9

今井年会実行委員より平成 13 年度年会準備状況についての報告があつた。開催時期に関しては、大学施設を利用する関係から休日に限られるため、平成 13 年 10/6(土)-8(月・祝日)以外の選択肢がないとの見通しが述べられた。会場は大阪大学吹田地区を予定。講演会場として医学部講義棟、シンポジウムなどの大会場として大阪大学コンベンションセンター、ポスター会場として体育館などを仮予約した。平成 13 年度年会では一般発表はすべてポスターとする。大木 H12 年会実行委員長より、UMIN は継続使用が望まれているので、本年度うまくいった場合は 39 回年会でも使用するのがよいとの意見があつた。

#### (10) 監査委嘱について （郷（通）） 資料 報 10

郷（通）会長より、宝谷紘一氏(名大)に平成 12・13 年度監事を委嘱したむね報告があつた。

(11)在外会員の会費について (郷 (通) ) 資料 報 11

これまで、海外に学生会員がいることは想定外だったが、今回在外の正会員 8000 円、在外の学生会員 4500 円(いずれも国内と同額)とし、航空便利用者は郵送料として+4000 円と決定したとの報告があった。

(12)広告掲載料金について (船津) 資料 報 1 2

船津委員より学会誌の広告掲載料について、広告募集を代行する株式会社エー・イー企画が生物物理学会に広告収入の 70%を支払うことで覚え書きを交わしたむね報告があった。ただし、年会予稿集の広告に関してはこの覚え書きとは別の扱いである。

(13)会誌のオンライン化と電子図書館について (石渡) 資料 なし

石渡編集実行委員長より、学会誌のオンライン化と電子図書館についての報告があった。4/1-4/3 の期間、会誌バックナンバーをプレ公開する。このプレ公開に関する意

見や感想は石渡編集実行委員長に 4/4 までに E メールで連絡するよう要請があった。

オンライン化に必要なハードウェアは学会が購入してリアライズ社に設置済み。オンライン入稿・編集に必要なソフトウェアも学会が購入するが、アカデミックプライスで購入のため、インストールが遅れた。オンライン入稿は会誌 4 号から実施する予定である。電子図書について、奈良先端大の図書館の電子図書館に生物物理学会誌のバックナンバーが納められているとの報告があった。この電子図書館の閲覧課金方式についての詳細は次回運営委員会で報告する。

(14)ホームページ共立出版リンクについて (由良) 資料 報 14

学会が企画したニューバイオフィジックス II の出版にあたり、学会ホームページに宣伝を載せたことが報告された。また共立出版のメールアドレスをリンクすることによりウェブ上での注文ができるようにしたとの報告があった。

(15)ロゴマーク選定について (郷(通)) 資料 報 15

郷会長より、学会のロゴマークがロゴマーク選定小委員会において決定された旨、報告があった。デザイナーは名古屋大学大学院生の三巻さんであり、選定委員の圧倒的支持で採用されたとの説明があった。石渡編集実行委員長によりロゴマーク中の"the

BIOPHYSICAL SOCIETY of JAPAN"の文字について最終案ではすべて大文字とした

が、現在発行中の学会誌に関しては変更が間に合わず、最終案と異なっているとの報告

があった。大木 H12 年会実行委員より、このロゴマークの数値化されたデータは存

在するのかとの質問があり、リアライズ社にデータがあるはずであるとの石渡編集実

行委員長の回答があった。

(16)第3回東アジア生物物理シンポジウムについて (郷(通)) 資料 報 16

第3回東アジア生物物理シンポジウムについて、日本からの参加者数が少ないので、

学会ホームページおよび会員への E メールで、参加呼びかけと若手旅費援助のアナウンスを行ったとの報告があった。由良委員が、若手の会メーリングリストを使って参加呼びかけをおこなった。日本からの参加者は 3/24 時点で 73 名であるが、4/1 時点では確実に増加している見通し。郷(通)会長から、今からでもより多くの参加を呼びかけるようにしてほしいとの要請があった。

(17)東アジア生物物理 シンポジウムの将来構想について (郷(通)) 資料 報 17

IUPAB カウンシルメンバーであるインド代表のゴビル氏から、東アジア生物物理シンポジウムに参加する国を広げることについて打診の手紙が郷(信)研連委員長宛にきているので、これに関して意見を出して欲しいとの要請があった。参加国をインドやオーストラリアなどに広げようとの意見がだされた。曾我部委員より早急な参加国拡大についての懸念が出された。月原委員より、世界的に地域別シンポジウム重視の傾向があるとの指摘があった。

(18)日本学術会議会員の候補者および推薦人について (郷(通)) 資料 報  
18

第18期日本学術会議会員候補者、推薦人および推薦人予備者について、現  
会長および元会長との話し合いにより物理学、分子生物学、細胞生物学各研連  
に推薦する候補者を決定したむね報告があった。候補者は以下の通り(物理学研  
連への推薦人は2名)。

|       | 候補者  | 推薦人          | 推薦人予備者 |
|-------|------|--------------|--------|
| 物理学   | 郷 信広 | 伏見 譲<br>垣谷俊昭 | 木下一彦   |
| 分子生物学 | 京極好正 | 阿久津秀雄        | 桑島邦博   |
| 細胞生物学 | 矢原一郎 | 楠見明弘         | 七田芳則   |

(19)物理学会の生物物理学分野の次期世話人について (桑島) 資料 なし

桑島委員より、物理学会の生物物理分野の次期世話人について、現若手世話  
人の後

任として上久保裕生氏(高エネルギー加速器機構・物質第二・助手)を推薦した  
むね報

告があった。片岡委員より、この世話人は物理学会会員である必要があるの  
ではない

かとの質問があった。桑島委員より、上久保氏は現在入会手続き中であるとの  
回答が

あった。

#### 審議事項

(1)平成12・13年度科研費審査委員候補者の選挙要項について (郷(通)) 資  
料 議1

(メールによる臨時運営委員会)(追承認)

郷(通)会長から平成12、13年度の科研費審査委員候補の選挙要項につ  
いてすでにEメールによる運営委員会を開催した経緯について説明があり、こ  
の議案に関する追承認の要請があり、承認された。

(2)平成11年決算報告(案)の承認および学会財政状況について (桑島) 資料

## 議 2

桑島委員より決算報告案と学会の財政事情について説明があった。平成 11 年度の

繰越金を除く実質収入は 3574 万円、実質支出は 3563 万円であった。平成 11 年度の支出で、会誌出版費が前年度実績に対して約 300 万円増、年会費が約 150 万円増、運営会費が約 70 万円増(泊まり込み運営委員会による)。今年度は、事務局開設準備金

500 万円の積み立ては実現できなかったと報告があった。平成 10 年度までは次年度への繰越金を上積み出来たのに対し、平成 11 年度は 11 万円のみしか上積みできていない。決算の承認に関して曾我部委員より、この決算についての会計監査はいつあるのかとの質問があった。11 年度の監査はこの運営委員会以降、年会の前までに行われるとの回答があった。難波委員から、決算の承認とは監査後に行うべきものではないのかとの質問があった。郷(通)会長は、ここでの承認はこの予算・決算案を監査に回すことに対する承認であるとの説明があり、そのように承認された。続いて、桑島委員より学会財政状態についての説明があった。平成 8 年あたりから、主として広告収入などで学会財政は好調、次年度繰越金が増加した。ところが平成 11 年度は次年度繰越金の上積みがほぼ止まった。理由は、広告の収入減と、会誌出版費の増大との分析が示された。

木下副会長から、平成 10 年度が突出して広告収入が多かっただけでは無いのかという質問があった。今年度の財政の悪化は、広告収入だけでなく、全般的に支出が増大しているとの説明があった。11 年度年会費が前年と比べて大幅にのびているのはなぜかとの質問があり、会場が大学ではなかったためとの回答があった。会誌について、以前は 800 万円程度であったものが、今年度は、予算の段階ですでに 1000 万円を越えているのはなぜかとの質問があった。石渡編集実行委員長は、一つには編集実行委員補佐費 60 万円が支払われていること、また会誌の紙質をよくしたこと、記事の字数制限を緩和したので会誌が厚くなったことも理由になっていると説明した。郷(通)会長より、収入が好調だった頃に、会誌の充実で費用をつかった結果現在のようになっているという指摘があった。また、会誌が厚くなっている分、郵送費も増加しているとの指摘があった。桑島委員より、どの支出もほぼ均等に増加しており、財政緊縮の必要があるという意見がだされた。案として、収支の改善には広告収入のア

アップと支出の引き締めが考えられる。支部長オブザーバーの旅費支給などを廃止して節減額は60万円程度になる。また、会誌のレベルを以前に戻してはどうかという意見がでた。木下副会長から学会の経常支出が広告に依存するのは不健全ではないかとの意見があった。郷（通）会長は、平成10年度までは毎年広告分は繰り越してきたが、平成11年度は経常支出に当てられたことを指摘した。桑島委員より運営委員が広告とりにも多少熱心になるくらいは必要ではないかとの意見がだされた。その他の案として、前会長時に30万円の若手の会の援助を決めたが、それを削減する。石渡編集実行委員長より、オンライン化や掲載スペースの節約により、極力出版経費を抑制する努力をする旨が述べられた。桑島委員より、事務局開設準備金について別会計にして会長室に積み立てるべきとの意見が出された。郷（通）会長より、事務局開設にこだわらずに、現在の約3200万円を学会のゆとり資金としてプールすることを考えるべきではないかという意見があった。これに関連して阿久津委員より、分子生物学会には、将来事業準備金という名目の資金があるとの指摘があった。阿久津委員より、繰越金を予算に繰り込むとわかりにくくなるので、繰り越しなしのバランスシートを出すべきではないかという意見、および200万円の学会準備金を会計に明示的に組み込むべきではないかという意見がだされた。片岡委員から、繰り越しと事務局開設準備費を除くと平成10、11年度の会計は拮抗しているので、繰り越し金が減っていくだけではないのかという意見が述べられた。郷会長から、本議案についてこの時間内で決定できないので、金額・名目などの細部は次回7月の運営委員会で審議できるように詰めることが提案され承認された。

### (3)支部長の運営委員会出席旅費および支部活動について（桑島） 資料 議2

桑島委員から、各支部長がここ2、3年オブザーバーとして運営委員会に出席しているが、運営委員会費の節減のためこのオブザーバーの旅費については今運営委員会から旅費支給を中止した経緯について説明。この件に関しての承認を求め、承認された。阿久津委員から、支部活動の活性化に鑑み、支部活動について運営委員会にはかることがあり、会長が支部長の出席を必要と認めた場合に限り旅費支出をするということかどうか、との意見が出た。ただし必要のある場合は支出する。また、支部費があるのでそれをあててもらうことも可能であり、基本的に旅費が自弁である年会の運営委員会で提案することも可能

である。桑島委員・大木 H12 年会実行委員長から、支部活動は北海道や東北などで毎年活発に行なわれているとの指摘があった。石渡編集実行委員から、支部活動について実体が周知されていないことから、会誌または学会ホームページに支部活動の報告を載せるとの表明があった。

(4)物理学研連へ推薦する科研費審査委員の選出方および選挙要項(案) (郷(通)・曾我部) 資料 議 4-1,2

物理学研連から科研費細目「物理学一般」の一段審査員の推薦を依頼された経緯の説明があった。会長・副会長で相談の結果、生物物理の審査とはかなり異なるので推薦が難しく、慎重に扱う必要があるとの結論に達した。そのため、物理学に詳しいと考えられる会員(垣谷俊昭氏、木下一彦氏、伏見 譲氏、永山国昭氏、吉川研一氏、郷 信広氏)を選んで各 5 名の候補者をあげてもらい、この候補者をもとに学会委員による選挙を行うこととした。候補者氏名は以下の通り。雨宮慶幸、石渡信一、垣谷俊昭、金子邦彦、木下一彦、神山 勉、笹井理生、住 斉、関本 謙、曾田邦嗣、太和田勝久、徳永万喜洋、中村春木、永山国昭、伏見 譲、船津高志、吉川研一。片岡委員より、選挙のために「物理学一般」の内包する分野についての情報が必要ではないかとの意見が出された。科研費の細目の一覧を選挙広報に付けて送ることで承認された。

(5)平成 13・14 年度委員候補者補充の件 (曾我部) 資料 議 5

平成 13・14 年度委員候補者補充の投票結果が示された。投票者数は 14 名であり、以下の 14 名の委員候補が推薦された、括弧内は得票数。伊藤悦朗(1)、岩佐達郎(1)、加茂直樹(1)、柴田穰(1)、高橋健一(1)、田村守(1)、太和田勝久(1)、中川将司(1)、新田勝利(1)、伏見譲(1)、前田雄一郎(1)、望月敦史(1)、矢野雅文(1)、由良敬(1)。曾我部委員より、毎回この委員候補者の投票数が非常に少ないことが問題点として指摘された。候補者を運営委員による推薦で補充することが提案され承認された。この推薦投票は 4/15 締め切りで、運営委員を対象に行われるむね通知があった。

(6)平成 13 年度次期会長候補者選出の手続きおよび選出 (郷(通)) 資料 議 6

学会委員による平成 13 年度次期会長候補者推薦の結果(報告 4) 上位 3 名

の候補について、選挙された場合に次期会長を引き受ける意志があることが説明され、今回の運営委で3名に絞ることで承認された。郷会長より投票権の確認があり、投票権を持つ会長、副会長、運営委員による3名連記の投票が行われ、即時開票の結果以下の様に上位3名が選出された。括弧内は得票数。柳田敏雄（13）、石渡信一（11）、津田基之（11）。

(7)平成13年度次期会長および平成13・14年度委員選挙要項(案)（曾我部）  
資料 議7

曾我部委員より、次期会長、運営委員の会員による選挙の要項案の説明があった。選挙方法は従来通りであり承認された。5月末に発行される会誌6月号に掲載する。

(8)UMINでの演題抄録公開等について（大木） 資料 議8

大木 H12 年会実行委員長より大学病院医療情報ネットワーク UMIN による平成 12 年度年会の抄録の公開について審議の要請があった。抄録の公開について UMIN 側からの要請があったことが説明された。曾我部委員から、抄録の公開についてあまり早く公開されると特許など先取権の関係から困るのではないかという意見、また、抄録を公開することで年会における抄録集の売り上げ減を危惧する意見があった。それに対して、大木 H12 年会実行委員長から、UMIN での公開は学会後であること、また、抄録は学会ホームページ上でも公開されるが、ホームページ上での公開についても、学会誌上で共通のパスワードを周知することにより無制限のアクセスを防止する方針であることが説明された。木寺委員から、年会当日の抄録集は数十部単位で売れているので抄録公開による打撃はあり得るとの指摘があった。結論として、学会プログラムの公開は出来次第直ちに行うが、抄録の公開は年会の約2週間前(8/25)に行うこと、および今回は試みとして、会員に限らず公開することで承認された。ホームページ上での学会員と非学会員のアクセス状況を調査する。

(9)広告キャンペーンの経過報告及び費用について（豊島・船津） 資料 議9

本年2月末、運営委員、委員または分野別専門委員70名を選んで新規広告獲得の依頼を送付した経緯の説明があった。3/29 現在で、会誌6月号に掲載される予定の新規広告の紹介があった。また、この件に関しては期限はないの

で、まだ広告依頼をしていない人は今から依頼して欲しいとの要請があった。豊島委員よりこのキャンペーン経費について、キャンペーン媒体資料の印刷費(147,000 円)は、学会広告業務を代行しているエー・イー企画と学会で折半、送付費用(22,400 円)は学会の負担とする。学会側負担については、最近広告費は毎年10%程度減少しており、また広告費の70%は学会側に支払われるため、エー・イー側も苦しいことから、やむを得ないのではないかととの見解が示された。木下副会長から、広告にかかる費用は学会の予算から使うことができるいう議決が4年前にされているので、問題ないのではないかととの意見があった。この合計95,000 円の支出について承認された。また豊島委員から、このキャンペーンにつき広告担当委員から会員に御礼・再依頼するためにはがきを送付する件の提案がなされ、広告を掲載してくれた会社には、郷(通)会長名で礼状を送ることを含めて承認された。

#### (10)「新生物物理最前線」出版編集委員会報告 (豊島) 資料 議 10

「新生物物理最前線」(仮題)発行について、編集会議議事録に基づいた説明があった。印税率は10%で、見込まれる印税総額は100~190 万円であるとの報告があっ

た。その後この印税について学会と執筆者で分配するが、その割合を運営委員会で審議

してほしいとの要請があった。郷(通)会長より、学会から執筆料として払うという形式にした方がよいとの意見があり、豊島委員より編者である美宅先生10 万円+5 万円、他の著者は5 万円という案が示された。阿久津委員から、学会から執筆料を払うのなら、予算に組み込まれる必要があるとの指摘があった。上記の案で承認された。

#### (11)高校生向けパンフレット作成について (豊島・片岡) 資料 議 11

生物物理学会作成の高校生向けパンフレットについて説明があった。高校に配布する。また雑誌にパンフレットの広告を出すことを計画している。学会ホームページに内容をアップロードする。経費の試算は、3千部を発行するとしてデザイン料、印刷代、郵送代などを含めて約40 万円。曾我部委員から、3千部ではなく、3万部くらい出す必要があるのではないかととの意見がだされた。片岡委員より、現時点では高校1校あたり2部程度の目算でいるとの説明があ

った。郷（通）会長から、学会の事業として位置づけられるので将来計画準備金を使っても良いのではないかと、3万部ならばいくら位になるか調べて欲しいとの要請があった。部数については増加する方向で了承された。片岡委員からパンフレットの内容の検討が要請された。意見を片岡委員あて4月末までにEメールで送ることになった。木寺委員から、内容について高校の理科の先生に意見を聞くような機会を持つのはどうかとの意見がでた。豊島・片岡委員より、高校の先生に意見を聞いたことがあるとの回答があった。曾我部委員から、このパンフレットを見て興味をもった高校生がさらに情報を求める際の配慮が必要であるとの意見が出た。具体的には、入門用の教科書として学会の本の広告をいれておけば良いのではないかと、あるいは学会ホームページから生物物理の研究室へのリンクを張っておく。由良・倭委員より、研究室のホームページへのリンクをつくることが提案された。不適当なリンクを制限する方法などで問題は残るが、進めることとなった。このパンフレットについては、次回7月1日の運営委員会で決定することです承された。

#### (12)生物物理バイオインフォマティクス講習会について（木寺）資料12

生物物理バイオインフォマティクス講習会実施案について以下の説明があった。

- ・実施場所は東京農工大。
- ・開催日時8－9月、11月18－19日の大学が休みの時期に限られる。
- ・今回初めて有料で実施するため、参加者数が読みにくい。
- ・企業系の参加者を見込んで、ドラッグデザインなどの内容を組み込んでいる。
- ・予定する講師数は10名である。
- ・全体で支出見込みは74万円である。
- ・会員、非会員、学生の参加費をそれぞれ3万円、1万5千円、7千円に押さえた場合、

参加者数が12名、12名、24名でも若干赤字が見込まれる。

- ・このため、参加費をあげるか、後日残ったテキストを販売して補充することが考えられる。

講習会案の審議より、開催期日については、11月18－19日で承認された。ま

た、参加費は上記の金額を設定し、参加者の獲得、または、講習会後のテキスト販売につとめることで了承された。

(13)ホームページからのリンクについて (木下) 資料 議 13

学会ホームページに広告(企業へのリンク)を載せることについて運営委員の意見を求める提案があった。現時点では、企業リンクをいっさい認めないとの選択肢もありうるが、会誌の広告に悪影響を与えず、会員の役に立つ様な形で、企業ホームページに対するリンクを張るやり方も検討すべきとの意見が述べられた。資料について運営委員各自で検討、後日アンケートを実施して、意見を求める事で了承された。

(14)第 18 期学術会議会員推薦に当たっての女性候補者の推薦について (郷(通)) 資料  
議 14

日本学術会議では、女性科学者の環境改善のための取り組みを行っており、学術会議の女性会員の増加にむけて学会がとった措置について、「第 18 期会員推薦人及び会員の推薦にあたっての調査」がきた。女性会員の育成策について、女性会員を役員などに積極的に登用する、自学会の女性会員を増やす方策を検討する、と会長名で回答したこと、また、今後の日本学術会議会員の女性候補者の選定および推薦人の指名の見込みについては、次期(第 19 期)以降について積極的に考慮したい、理事会・総会等で継続的に検討したい、と回答したとの報告がなされた。現在、学術会議会員 210 名中に女性会員はたった 2 名である。物理学研連の様に 5 人の学術会議会員が推薦されるような大選挙区制的な形態だと、女性候補を推薦しやすい。まず生物物理学会の中で、女性会員を増やすために、学会内で検討をしていく必要があるのではないか、この問題の検討専門委員会を設立するなどの方法が考えられるのだが、運動の方向をどこにもっていくべきか意見を求めた。阿久津委員から、ほかの生物系の学会に比べて、生物物理学会は女性の参加者が少ないので、底辺を広げる意味からも、女性会員の数を増やす努力をつづけていく必要があるのではないかとの意見があった。郷(通)会長より、生物物理学会内にこの問題の専門委員会を作る必要があると考えられるので、Eメールで意見を会長まで送って欲しいと要請があり、継続審議とすることが承認された。

連絡事項：

第4回運営委員会は7月1日（土）13：00から、第5回運営委員会は9月11日

（月）昼（年会中）、平成13年度第1回運営委員会は9月13日（水）昼（年会中）に行う。